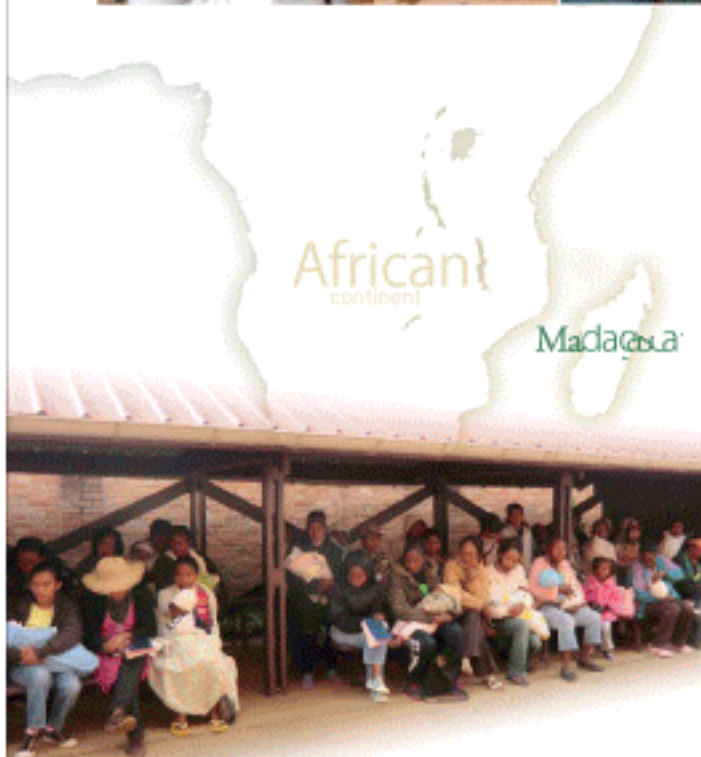




# 子どもたちの笑顔を取り戻すために。

昭和大学マダガスカル医療協力チーム



ねてから後進国への病院建設の支援プロジェクトに参加している曾野氏から、マダガスカルのアンチツベにある病院の手術室建設の話聞いた。  
 アフリカのインド洋に浮かぶ島、マダガスカル共和国。国土面積は58万7041平方キロメートル、日本の約1.6倍の広さを有する。ほぼ真ん中に位置するアンチツベ市は人口3万の都市でそれ以南には大きな病院施設は皆無だという。形成外科医、おひひ口唇口

派遣DATA

Date: 2012.6.12(火)~23(土) 12日間

Member

【医師】

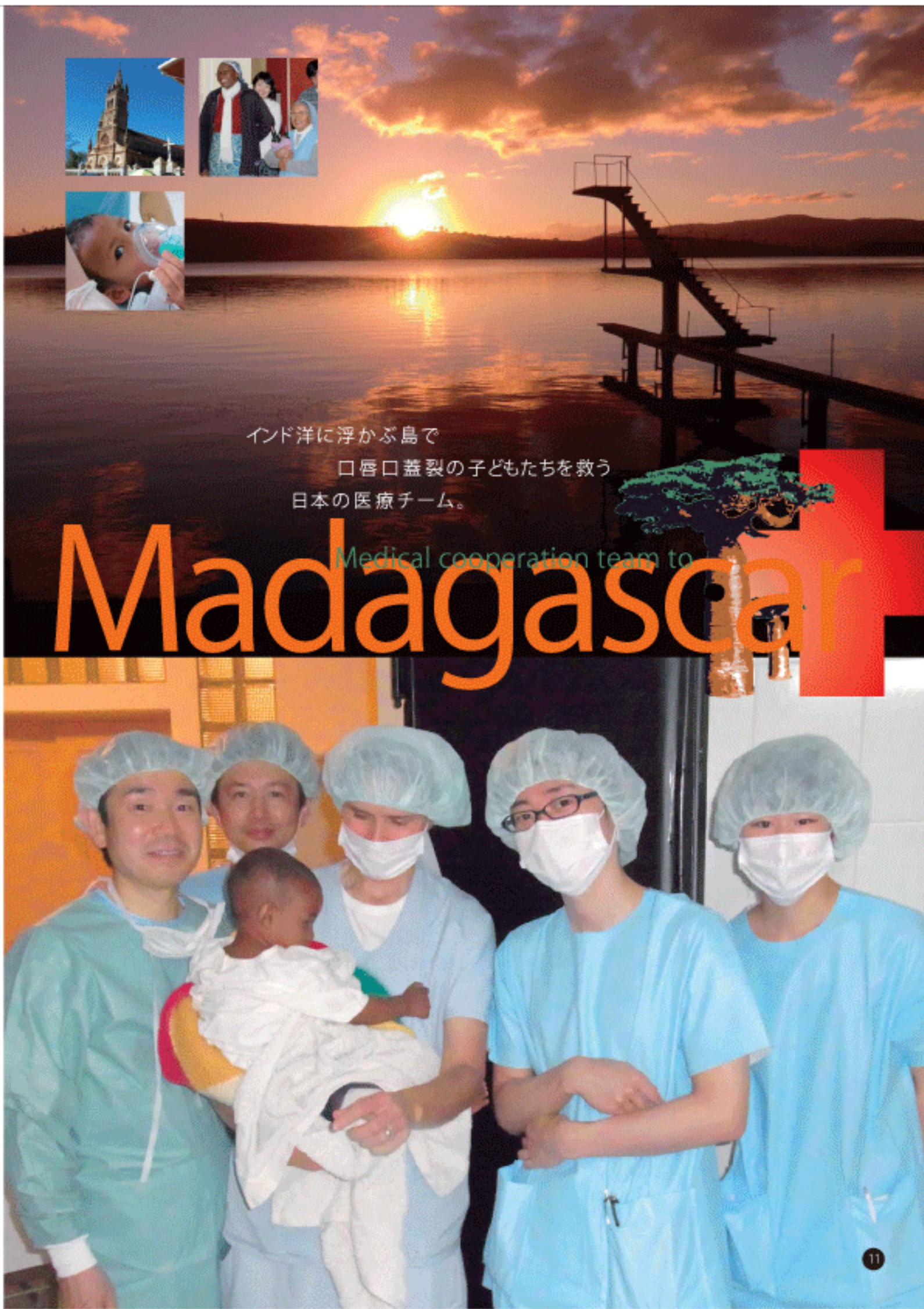
◎形成外科/土佐泰祥 准教授・黒木知明 助教  
 ◎麻酔科/大塚直樹 講師・中川元文 助教

【看護師】

小野寺千春(昭和大学病院)  
 志方舞衣(昭和大学藤が丘病院)  
 吉田薫(昭和大学横浜市北部病院)

【学生】

林純一(医学部6年)・齋藤なみ(保健医療学部4年)



インド洋に浮かぶ島で  
 口唇口蓋裂の子どもたちを救う  
 日本の医療チーム。

# Madagascar

Medical cooperation team to

聖夜のひと言が  
 マダガスカルへ

「マダガスカルで医療支援をするおつもりはありますか?」  
 形成外科医土佐泰祥は、2年前のクリスマスにそう話し掛けられた。声の主は作家の曾野綾子氏である。  
 土佐の父と曾野氏の末三浦朱門氏は高校の同級生で、家族ぐるみの親交を続けていた。その日、聖夜の晩餐に曾野夫妻の自宅に招かれた土佐は、かへ

蓋裂を専門とする医師が不在という現状を聞き、心が動いた。土佐自身、以前ネパールで口唇口蓋裂手術のボランティア医療活動をしたことがあった。  
 「自分が昭和大学で学んだ技術と知識がマダガスカルでも役に立てれば」  
 さっそく大学に働きかけ、さらに日本財団などの協力を得て、昨年マダガスカルへの医療協力が実現した。  
 そして2回目となる今年、2012年6月12日から23日まで、土佐をリ



**Madagascar**  
 昭和大学  
 マダガスカル医療協力チーム

リーダーのMEMO

メンバーの健康管理の  
 重要性を再認識

形成外科 津教授 土佐 幸洋

同じ「昭和大学」チームといっても  
 職種も違えば、普段は職場も違います。  
 当然、それぞれのライフスタイルは違う  
 わけで、急速の医療チーム、限られた  
 人数、そしてや異国の慣れない地で  
 は、多少のストレスがたまってしま  
 います。リーダーとしてメンバー全員の心  
 身のコンディション管理の重要性を再  
 認識しました。そうした中で若い学生  
 2名はカルチャーショックを受けながら  
 も、柔軟に対応していて頼もしく感じま  
 した。とても意義ある実習だったので  
 はないでしょうか。

今回の課題をしっかりと受け止め、  
 来年以降に生かしていきたいと思っ  
 ています。



Patient

口唇口蓋裂は顔の見える位  
 置のため、いじめの対象にも  
 なりやすく、心のキズになりや  
 すい。医療チームの鮮やかな  
 笑顔に家族も大喜び。

最終日は現地のスタッフが晩餐会を開いてく  
 れた。手づくりの食事で労をねぎらい合う、手術  
 を受けた家族もお礼に駆け付けてくれた。



普段裸足で生活している患者もいる  
 ため、ボランティヤスタッフに術前にシャ  
 ワーで全身洗ってもらい、その後タオルや  
 湯たんぽで保温しながら手術まで待機  
 してもらった。  
 今回、手術した口唇口蓋裂の子ども  
 の中には、過去に他国の医療ボランティ

「シャワーや入浴の生活習慣がなく、何  
 日も着替えを行わないなど、実際に手  
 術を行う患者やその家族と接して、不  
 衛生な生活環境を目の当たりにしまし  
 た。」看護師 吉田 薫。

「ボランティヤの質は、  
 常に問われる。」

限られた日程の中、一人でも多くの子  
 どもたちの治療を行うため、1303〜4  
 件の手術が相まった。電力事情も乏し  
 く、手術室には照明が蛍光灯1本と小  
 さな無影灯2台しかない。夕方を過ぎ  
 ると室内は暗く、針や糸の操作がスム  
 ーズにいかない。衛生面でも日本とのギャ  
 ヲに戸惑った。

「ボランティヤの質は、  
 常に問われる。」

「2年越しの子どもたちを含め、今  
 年は66名が診察に訪れ、23件の手術を  
 行った。ほとんどが口唇口蓋裂の手術で、  
 その他に頬部巨大母斑の10才の女の子  
 と手指屈曲拘縮の12才の男の子の手術  
 を行った。」

「よりベストな状態で医療を提供してい  
 くためには、スタッフの体調管理も考慮  
 する必要があります。この点はチームで  
 話し合い、次年度からは1303件までと  
 する改善案が出ています。」看護師 小  
 野 幸千恵

「医療の質は常に問われる。」

「支援を超えた、  
 「医療」の重要性

もちろん、医療チームの課題もある。  
 毎日8時から診療開始、終わりは夜9  
 時をまわることもあった。慣れない異國  
 の地での手術の連続に体調を崩すメン  
 バーも中にはいた。

「辛い、すべての患者さんを土佐先生が  
 見事に修正され、スタッフ、患者さんご  
 家族はもとより、たまたま見学に訪れ  
 ていた海外の留学生連も驚嘆するまで  
 に改善しました。しかし、例えば無償で医  
 療を提供するとしても、その質について  
 は一定の水準が担保されるべきだと強く  
 感じました。」(形成外科医 黒木 知明)

「医療の質は常に問われる。」

シスター牧野をはじめ、  
 現地の看護師、さら  
 に大使館職員も駆け  
 付け、治療支援に加  
 わった。写真は術前  
 のシャワー風景。

Staff



昨年に引き続き、活動拠点となったア  
 ヴェマリア産院。ここは、曾野氏の著書  
 『時の止まった赤ん坊』の舞台のモデ  
 ルでもある。

Hospital



日本と同等の医療を提供すること。それが、教育につながる。

「口唇口蓋裂を中心に  
 23件の手術を実施」  
 マダガスカルはバングラ経由で首都アン  
 タナナリウに入る。日本から持ち込んだ  
 手術機材等は約80個にも及んだ。  
 バングラの空港が滑走路工事中で到着  
 が遅れ、マダガスカル便への乗継ぎが心配  
 でした。すると、我々の乗ったANA機が  
 マダガスカル航空機の真横のスロットに駐  
 まり、1時間程の驚異的なスリットで乗  
 継ぎを完了させました。後で聞いたので  
 すが、ANAの特別なオペレーションだろ  
 うなそうです。(麻酔科医師 大塚直樹)

「国際支援の意義は問われるすべての人々  
 の共通理解によって高められる。日本と  
 同等の医療を提供するため、チームが持  
 ち込んだ機材はほぼフルセット。大量の  
 荷物もANAの配慮により手早くマダ  
 ガスカル便へと乗り継ぐことができた。  
 深夜に首都アンタナナリウに着いた  
 一行は翌朝、活動拠点となるアンツィラベ

市・アヴェマリア産院へとバスで移動し  
 た。到着後すぐに手術室の準備に取  
 り掛かる。施設中庭には早くも大勢  
 の手術希望者達が集まっていた。その  
 中には昨年、「来年年ね」と声を掛けた  
 子どもたちの顔もあった。  
 マダガスカルの子どもたちは総じて米  
 糞状態が悪い。低体重・低栄養のため手  
 術を受けられないケースも少なくなく、  
 そんな子たちに、「しっかり食べて体重を  
 増やしてから、また来年おいで」と声を  
 掛けた。



「予定表に身長と体重を記載していくと、  
 4歳で身長が80〜95センチメートル、体  
 重が10〜15キログラム程度で体格は小  
 さく、栄養状態の悪さに驚きました」  
 (看護師 志方 舞衣)





持ち込んだ滅菌用の機材もオーバーヒートしてしまい使えなかった。帰国後、すぐに機材の検証を行うと、高地のため、気圧の変化が原因であることがわかった。

既に来年以降の対策は着々と進んでいる。

「ただ行って、手術して帰るだけの支援ではなく、継続して行い、現地の医療スタッフの『医育』となることが重要なんです」(土佐)

その成果として、現在、マダガスカル人医師が昭和大学形成外科に留学中である。こうした技術交流こそ国際医療支援の意義といえる。いずれは現地の医療レベルが上がり、海外からの医療協力チームが不要となるのが土佐らの願いだ。

また今回、学生2名がチームに同行しているが、こうした若い世代の貴重な体験は日本の医療にとっても大きな力になるだろう。

手術前は絶対に口元を押さえて見せなかつた女の子。無事に手術を終えると

はにかみながらも口元の手術跡を見せてくれた。治療中、終始無言だった手指屈曲拘縮の男の子は別れ際にどこで覚えたのか、ARIGATOU.と言ってくれた。「音楽と同様に、医療に国境はありません」

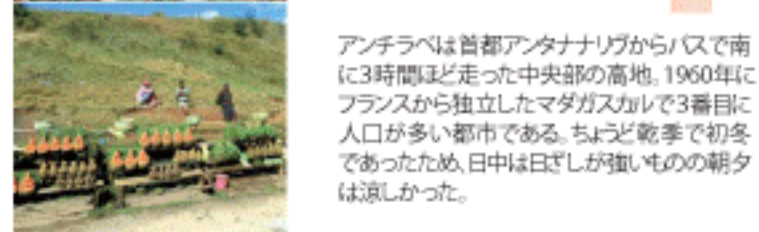
土佐のその言葉どおり、医療が国を超え、子どもたちの笑顔を取り戻す。「朝から夜まで力ノツメでしたが、それが私たちのミッション。診療活動以外でもシスターをはじめ様々な経験をもちの方々と触れ合えたことはとてもいい経験でした。ぜひまた参加したいです」(麻酔科 中川元文)

昭和大学医療協力チームのマダガスカル行きは来年、再来年まで内定している。



### Town & Life of people

アンチラベは首都アンタナナリブからバスで南に3時間ほど走った中央部の高地。1960年にフランスから独立したマダガスカルで3番目に人口が多い都市である。ちょうど乾季で初冬であったため、日中は日差しが強いものの朝夕は涼しかった。



フランス文化の影響が至る所に残されており、洒落た建物も見られる。子どもたちの人懐っこい笑顔が印象的。しかし、裸足で生活している人など低所得層も少なくない。実際、病院に来た患者さんも裸足の人が多かった。



## Madagascar

昭和大学  
マダガスカル医療協力チーム

参加した学生のMEMO ①

### チームがひとつのオーケストラのようよ

医学部6年 林 純一

今回の活動で印象に残ったことは、現地で医療支援は医療チームだけでなくそれ以外のスタッフに支えられているということです。日本財団や財団記念財団のスタッフの方々が手術を行う前に患者さんの体を洗ったし、術前には様々なことを手伝っていただいたおかげで、手術がスムーズにできるのを感じました。土佐先生の「チームがひとつのオーケストラとなり、手術を成功させることができた」という言葉がとても印象的でした。

病室の手術室は想像以上にきれいで驚きました。働く看護婦の人も一所懸命で熱意にあふれている方ばかりでした。その一方で、本来なら直のついで使用済みのゴム手袋は感染性廃棄物として破棄すべきですが、水洗いして再利用しようとするなど、現地のリスク管理の側面を目的の当てはまりました。

参加した学生のMEMO ②

### 現地の人の生活に触れ、考えさせられました。

保健医療学部4年 西藤まなみ

マダガスカルでは保険に入っていないのが当たり前の国でした。病院への受診率も30.7%で約70%の人は病気になっても病院へ行かないそうです。そんな中、私は手術を受けた子どもの家に訪問させていただく機会がありました。部屋は2つしかなく、5人家族が住むにはとても狭い空間でした。電気も標準電圧1つ、扇も1つしかないため、暑間でも薄暗い。でも、ここで料理を作り食事すると嬉し、とても楽しかったです。その日は地面がコンクリートであったので、まだ綺麗な家だと感じ、また驚きました。

今日、日本では当たり前と考えられていることが当たり前ではないということを実感させられるとともに、医療を受けることばみんなができる行為ではないということも改めて気付きました。この経験を生かし、医療に物ごとを考え、広い視野を持った看護婦になりたいと思います。